

結社誌を訪ねて

中原 修子

戦争を語る 白髪春の海

横川 一子

「暁」五月号

とても重い作品です。春の海という季語は、晴れ渡った空、長閑な潮騒、そして柔らかな春風という風景を想像しがちですが、同時につらい思い出も沢山含んでいます。東日本大震災もしかり、掲句も同様です。第二次世界大戦では十二歳に達した児童は軍需産業へ学徒動員されました。現代ではもう優に九十歳を超える方々です。九十九歳以上の方がいらしたならば、徴兵されて参戦されています。髪は殆ど抜け落ち、残った髪も真っ白です。そのような方はあまり辛い記憶を話してくれません。戦争は人間性を奪い、生きるためには手段を択ばない非道なものだからです。しかし、ただ想像するだけの私たちには戦争の悲惨さは身に染み伝わっていません。少なくともその一部でも話して欲しいと願っています。人生の終焉にあたり、その方はぼつりぼつりと絞り出さように当時の体験談を話しました。貴重なお話ばかりです。ハワイ奇襲、インパール作戦、硫黄島など辛い過去の体験を春の海は呑み込んでいます。横川氏は、真摯に戦争を見つめておられます。

一直のキリンの首へ春の雨

古澤 宏樹

「歴史」五月号

キリンの首を「一直の」と実的に的確に詠まれている作品です。キリンの首は餌を取るため、また捕食者をいち早く見つけるために、あのように進化したのでしょうか、しかしながら、動物園にいたのでは、長い首は殆ど使い道がありません。首どうしをぶつけ合う仲間もいません。檻の中より、家族連れや遠足の児童など外の世界を眺めるだけです。曇天の今日は来園者も少なく、眺める対象もまばらです。長い首へ温かな春の雨粒が落ち始めました。キリンは雨粒を身震いして振り払います。そろそろ厩舎へ入れられるようです。キリンの茶色の斑模様と春の雨という、まるで絵画を眺めているようなびやかな作品です。

こども食堂紙の雛を卓毎に

竹内 榮子

「榎」五月号

こども食堂とは、地域の子供たちに無料または低額で食事を供給する場所です。経済的な理由や家族で食事をとることが難しい子どもたちに対し、NPO法人やボランティア団体が温かい食事を提供しています。近くのこども食堂ではスケートボードの練習や学習支援なども行っています。今日は桃の節句です。蛤のお吸い物やちらし寿司のような御馳走が出るわけではないのかもしれませんが。しかし、支援者が折り紙で折った一對の雛人形が食卓に飾られています。女の子の健やかな成長を願い、また男の子も一緒に緒になって雛祭を祝い、食を囲むことでしよう。温かな大人の配

慮がどうか子どもたちに伝わり、楽しい夜を過ごせますように。

光の春われも光の宇宙人

酒井 弘司

「朱夏」百八十号

春は光あふれる季節です。この作品は光という語が重複して用いられているため明るさに満ち満ちています。しかも詠まれていたのは地球だけではなく宇宙全体に関係するものです。子供達は、「宇宙人なんていないよ。」という時もあります。しかし、私たちは太陽系第三惑星の地球という星に住む宇宙人そのものですよ、と伝えると驚いた顔をします。一億五千万キロ離れた唯一の恒星から光が届きました。灼熱の光でも、細かい光でもなく、生物が生きるためにうつつけの明るさと温度の春の光です。その光がなければ植物は育たず、草食動物も肉食動物も死に絶えてしまい、この世は全くの暗黒になってしまうのです。朝になれば太陽が昇ってくるという奇跡の中で、わたしたち宇宙人は明るく煌いて暮らしています。この太陽光のおかげで草木が芽吹き始めました。新しい年度が始まり、春の日射しに満ちた日々が続いていきます。

さよならが両手に残る余寒の日

鈴木 康世

「水明」四月号

俳句を鑑賞させていただく時に、作者の年齢や経歴などを調べべきだという考えもありますが、どんな方の作品であれ、その方の手を離れた後は、俳句は自由に味わえるものと考えています。予備知識や先人観なしで作品を味わわせていただくことも大事だと考えます。

この作品の伝える別れというものは作者にとつて重いものだったようです。力いっぱい両手で相手を抱きしめて別れたのか、千切れるほど両手を振って別れたのか、あるいは亡くなった方の柩を運んだのか、いずれにしろ「さよなら」がまだ両手に残っているという詩的な表現が強く心に迫ってきます。立春も過ぎ暦の上では春であるにもかかわらず、風はまだ冷たく冬の名残が残っている余寒の中に、熱く別れた「さよなら」が両手に、そして全身に残っているのです。辛い別れのあとの放心までも感じさせてくれる作品で、俳誌「水明」の「今月の巻頭句」の第一作品です。

初蝶は二死満塁をはればれと

杉浦 圭祐

「草樹」一一七号

初蝶と野球を組み合わせた俳句は珍しいので、とても惹かれました。二月末からプロ野球もオープン戦を開始していますが、ここでは昼間の草野球や、学生野球の試合であるように思われしました。九回裏の攻防でしょうか、ここで得点が入るかどうかによって明暗は別れます。ホームランが出れば劇的なサヨナラになるかもしれません。投手も打者も守備もびりびりと神経を尖らせ必死の形相です。その時、今年初めて見る白い蝶が、緊張した球場の中を野球などお構いなく、ひらりひらりと飛んできていきます。他の観客は初蝶など気にも留めていません。しかし、俳人である作者の眼は一瞬に初蝶の存在に気づきます。野球の緊迫した一瞬という人間の営みと、春の季節を感じさせる自然の生き物の飛翔が交錯した美しい作品です。

（筆者住所

〒310-0853

茨城県水戸市平須町一八二八―五七二）